

不純な愛縛とわかっていても

第一章

十月に入り、茹^うだるような暑さが和^{やわ}らいできた。

夜になるにつれ気温も下がり、温められた空気を押しつけるかの如^{ごと}く、冷たい風が吹く。まだ寝苦しい夜もあるが、先月に比べれば過^ごしやすくなった。

それもあってか、キャバクラ「Avehaard」(アブハザード)も盛況で、全てのテーブルが埋まっている。

昼間はIT企業の総務部で、夜はキャバクラの新人キャバ嬢として働く二十四歳の須崎友梨は、華やかでありながらも嫉妬が渦巻く世界を見回した。

先月から働き始めているが、未だにこの雰囲気慣れない。というのも、実は不特定多数の男性を喜ばせるのが大の苦手だからだ。

元々、友梨は常に自分が正しいと思う行動を取ってしまう性格だった。

良く言えば積極的、悪く言えば無鉄砲……

昔からその性格は治らず、両親には「動く前に、一度立ち止まって考えなさい」と言われていた。とはいえ、気質なんてすぐ変わるものではない。両親はそれをわかっているからこそ、友梨が

親元を離れた今でも、会えば毎回注意していた。

そういう性格の自分に、キャバ嬢が務まるはずがない。でも、ここで働かざるを得ない事情があった。友梨の気性が災いし、不運にも「慶済会」という組に属するヤクザの高級車を傷つけてしまったためだ。

そのせいで多額の借金を抱え、現在は返済に追われる日々を送っている。

「はあ……」

友梨は自分の置かれた立場を再認識するため、着飾った姿に目をやった。

Dカップの乳房を中央に寄せて深い谷間を作る淡いエメラルドグリーンの子ニドレスは、なんて淫らなんだろう。しかも客に見惚れてもらえるよう、豪華なアクセサリーを身に着け、きつく巻いた長い髪を背中に下ろしている。

普段の自分と全然違う姿に、友梨はため息を吐かずにはいらなかった。

「ユリちゃん？」

その声にハッとすると同時に、隣に座る四十代の男性客が友梨の手を握ってきた。

現在、友梨はユリという源氏名で働き、ナンバターのマナミのヘルプを務めている。彼女が指名を受けて下がっている間、客を飽きさせないための繋ぎ役だというのに、すっかり意識を飛ばしてしまった。

「また君に会えて嬉しいよ。もう僕を覚えてくれた？」

「もちろんです。マナミさんのヘルプとして入るわたしを受け入れてくれてるんですもの」

友梨は笑みを浮かべて謝るも、心が追いつかないせいで頬が引き攣ってしまふ。

「すみません、すぐにお代わりを作りますね」

前屈みになり、テーブルのグラスを取る。

顔を隠すことに成功した友梨は、空のグラスに氷を入れ、ウイスキーのボトルを掴む。しかし、

男性客が友梨の首に触れて軀を寄せてきた。

「ユリちゃんのためなら、ドンペリを入れてもいい。そうしたら、僕とアフターに行ってくれる？」

唐突な男性のお願いに、友梨は困惑して目を泳がせた。

新人キャバ嬢はあくまでヘルプという立場。その域を逸脱してはならないと、研修で口酸っぱく言われた。キャバ嬢たちの関係を円滑にするための決まりだ。

もし一つでも違反すれば、ペナルティが発生する。借金が増えるのも痛い、それ以上に危険が及ぶ行為だけは避けたかった。

ここで失態を犯せば、多額の借金を返すアテがなくなってしまう。そうなれば、さらに危険な仕事にシフトチェンジさせられるかもしれない。

キャバ嬢の誰も「ヤクザ」や「慶済会」という言葉を口にしないが、ヤクザがここを紹介した以上、絶対になんらかの繋がりがあふ。

早々にヤクザとの関係を断ち切るためにも、我慢しなければ……

友梨は奥歯を噛んで感情を押し殺したあと、男性客に不快な思いをさせないように口元を緩めた。「わたしへのご好意、ありがとうございます。でも、お気持ちにはマナミさんへ。さあ、どうぞ」

マドラーで中身を軽く掻き混ぜたあと、グラスを差し出す。しかし男性客は、友梨の手の上からグラスを掴み、耳元に顔を寄せた。

「マナミちゃんにはわからないようにするから、仕事が終わったら僕と付き合っつてよ。いろいろと弾んであげる……」

男性客が囁き、友梨の首筋にふっと息を吹きかけた。

あまりの気持ち悪さに顔を歪め、咄嗟に男性客の手を退けた。

「あのですね——」

つい感情のまま文句を言おうと口を開きかけた時、マナミがちょうどこちらに歩いてくる姿が目の端に入った。

友梨は慌てて居住まいを直し、表情を取り繕う。

「待たせてしまっつてごめんなさい。ユリはきちんとお相手をしてくれたかしら？」

艶やかな笑みを顔に貼り付けたマナミが、優美な所作でソファに座る。

「マナミちゃんがいなくて寂しかったけど、ユリちゃんがその時間を埋めてくれたよ」

「それなら良かった。ユリ……」

マナミが、男性客から友梨に視線を送る。席を外していい合図だ。

友梨は笑顔で挨拶してテーブルをあとにし、そそくさと奥の休憩室に行こうとする。でも、その途中でキャバクラの雑務をこなす黒服の滝田が、友梨の行く手を遮った。

黒服は、店内で問題が起きないよう周囲に目を配っている。仕事なので文句などないが、何故か

滝田は友梨がキャバクラで働き出してから、ずっと監視の目を向けていた。

特に何かをするわけではないが、それでも他のキャバ嬢に対する態度とは明らかに全然違う。

滝田はヤクザの命令を受け、友梨がきちんと働いているかを見張っているかもしれない。

「ユリさん、先ほどの素振りはいかがなものかと。ヘルプとしての心構えがまだ身についていませんよ」

「すみません。以後……気を付けます」

素直に謝つても、滝田はまだ不満げに見つめてくる。もやもやしたものが胸の奥に広がるものの、友梨は黒服に黙礼し、キャバ嬢が集う休憩室へ入った。

その後、黒服に呼び出されてはお客のもとへ戻るといふ行動を繰り返し、そうして数時間経った頃、ようやく仕事が終わった。

「疲れた……」

日中は会社で働き、夜はキャバクラでお酒を飲んではお客の相手をしていれば、そうなるのも当然だ。しかも徐々に疲れが蓄積され、会社でもミスをしてしまう始末。

大事になる前に注意を受けるので今は大丈夫だが、このままでは集中力が落ちて大きな失敗をするのは火を見るより明らかだ。

上司に副業の事実を知られてしまう前に、なんとかしないと……

いろいろと考えながら派手な化粧を落とし終えた時、休憩室にいるのは、送迎車を自由に使えるナンバーワンからナンバーファイブのキャバ嬢だけになっていた。

友梨も急いで出なければと、先輩たちに頭を下げる。

「お先に失礼します」

「一緒に乗っていく？」

ヘルプについて以来、毎回友梨を気遣ってくれるマナミが声をかけてくれた。

しかし、この日も自分の立場をわきまえて、丁寧に「タクシーで帰ります」と返事をし、店内を掃除する黒服たちにも声をかけて外へ出た。

涼しい風が優しく頬を撫でていく。

「ああ、気持ちいい……」

友梨は顔を閉じて心地よい風に身を委ねていたが、しばらくして小さく嘆息した。

「帰ろう」

独り言を呟き、タクシー乗り場へ歩き出そうとした途端、足をびたりと止める。縁石に腰掛けていた人物がすくつと立ち上がり、不意にこちらに歩いてきたためだ。

街灯の灯りを受け、真つ黒だった人影が姿を現す。その男性が誰だかわかると、友梨は目を見開いた。

先ほどマナミのヘルプで入った際に相手をした、あの男性客だ。

「待ってたよ……」

友梨はざつと背後を振り返り、マナミがいるかどうかを確認する。しかし彼女はいない。そう、いるはずがない。今夜、彼女はアフターを入れておらず、真つすぐ帰宅すると知っているからだ。

「ユリちゃん」

「あの、どうして——」

友梨は戸惑いを隠せず、あたふたする。そうしている間に男性が傍に近寄り、友梨の手を取った。あまりにも不作法な態度に、友梨は目を見開く。

「アフターの約束を入れてないから……いいよね？ もし店に知られても、偶然会ったと言えば大丈夫。マナミちゃんには一切迷惑はかからないよ」

男性は友梨の手首の内側を軽く擦り、舌舐めずりした。

その気持ち悪さに反射的に手を引くも、友梨は感情が顔に出ないように必死に取り繕う。

相手はマナミの常連客。彼女に迷惑をかける真似だけは絶対にしたくない。

友梨は小さく深く息を吸ったあと、誠意を込めて男性を見上げた。

「ごめんなさい。わたしは新人なので、まだアフターは——」

「うん、だから……さ、他の客より先に手を付けたらいいっていうか」

男性の言い方に、怒りが湧くよりも嘔然となる。

キャバ嬢をなんと思っているのか。もちろん上昇志向のキャバ嬢もいるので、こつそり先輩の客を奪おうとする人たちがいるのは知っている。

でも友梨は違う。キャバ嬢としてナンバーワンになりたいわけではない！

「本当にごめんなさい。どうか、アフターはマナミさんを……っ！」

相手を逆撫でしないように優しく言って終わりにしたかったのに、男性が友梨の腕をきつく掴ん

できた。友梨は、彼に抗議の目を向ける。

「何をなさるんですか？」

「ユリちゃん、僕を拒まないでよ。マナミちゃんのヘルプが終われば、客の奪い合いが始まる。今……僕と付き合ってくれたら、絶対ユリちゃんに貢ぐから……ね？」

男性が無理やり友梨を引っ張る。彼の乱暴な態度にとうとう我慢できなくなり、友梨は腕を引いた。でも、彼が強く掴んでいるので振りほどけない。

「離していただけませんか？」

「どうしてそんな言い方を？ さあ、僕と一緒に来るんだ！」

男性はハザードランプを点灯させた車の方へ、友梨を引きずって行こうとする。

「ちよっ、離してって言ってるでしょう！ ……警察を呼びますよ！」

男性の傲慢な態度に腹が立ち、友梨が悲鳴に近い声で叫んだ。

「何を騒いでいるんだ！」

唐突に、威圧感のある声音が路地に響き渡り、友梨は心臓を鷲掴みにされたような痛みを覚えた。その衝撃に驚きながらも、声が聞こえてきた方向にさっと目を向ける。

そこには二人の男性が立っていた。背の高い男性は友梨たちを凝視し、もう一人の男性は彼の背後に控えている。

印象的な前者の男性は、シヨートの髪に緩やかなパーマをかけ、茶系のサングラスをかけている。容貌や外見からどういう人物なのか感じ取れないが、引き締まった体躯、深夜だというのに疲れない

ど滲み出していない出で立ちから、安易に想像できた。

周囲の者をいとも簡単に屈服させられる男性だということを……

また、見事な仕立てのスリーピースのダークスーツ、高価そうな腕時計、そして男性の部下を従えていることから、とても地位のある人だと見て取れた。

多分、友梨の考えは正しいだろう。でも、この人はいったい？

友梨がこちらを見据える男性の前で様子を窺っていると、彼が不意に唇の端を上げ、かすかに顔を横に動かした。

「猛、この女性と面識は？」

「ありません」

「だったら男女間のことに口を挟まないでおこう……と言いたところだが、うちの店の前で騒がれては見て見ぬ振りなどできないぞ」

うちの店の前つて、Avelasard、を指している。つまり、この人は慶済会に属するヤクザ!?

「まやか Avelasard、？」

友梨と同じ考えに至った男性客が囁くと、サングラスをかけた男性が即座に反応した。

「うちの顧客か？」

「あっ、いや、僕は……。ユ、ユリちゃん、また今度遊びに来るよ！」

友梨にちよっかいをかけていた男性客はあたふたして走り出す。途中でよろけて躓いたり、転んだりしても振り返らず、その場を逃げていった。

友梨は男性二人の傍に取り残されて、居心地が悪くなる反面、感謝もしていた。結果的に助けられたからだ。

でも、この男性と関わったせいで、今回の件が借金をしたヤクザに露見するかもしれない。彼に騒ぎを起こして面子を潰すな」と言われていたのに、それが伝わってしまったらどうしよう。ここは挨拶だけして、さっさと帰るに限る。

友梨は心の中で頷いたあと、サングラスをかけた男性に深く頭を下げた。

「助けてくださってありがとうございます。あの、失礼します」

そう言っ、男性の返事を聞く前に素早く身を翻す。

しかし友梨が足を一步踏み出そうとしたところで、男性に「待て」と鋭い口調で止められた。

有無を言わせない空気に友梨の軀がビクンと跳ね上がり、身動きできなくなる。

上司に叱責されてもここまでの恐怖を覚えたことがないのに、どうして初対面の男性にこんな反応を示してしまうのだろうか。

「今の男と何があったか、話を聞かせてもらおうか。……猛、事務所に連れて来い」

「はい」

友梨が振り返ると、部下と思しき人に命令を下した男性は堂々とした足取りで、*“Avehasard、”*のドアを開けて中に入った。

「面識はありませんが、あなたは *“Avehasard、”* の従業員ですよね。」

猛と呼ばれた男性は、丁寧な言葉遣いながらも友梨の退路を塞いで威圧してくる。

先に店へ入った男性より、全体的に雰囲気柔らかいものの、目の前の人もまた相手をやり込める行為に慣れている感じだった。

「ここは絶対に抗わない方がいい。」

「……はい」

「では、来てください」

素直に応じる旨を伝えたのに、男性は友梨の腕を掴み、店内へ引つ張っていく。

友梨と男性を見るなり、掃除中の黒服たちがぎよつとするが、瞬間に態度を改めて頭を下げた。

「東雲さん、おはようございます」

黒服たちは、口々に挨拶し始める。

東雲と呼ばれた男性は何も言わず、表情を消したまま前だけを向いていた。

彼らの振る舞いから、東雲は黒服たちよりも上の地位にいるのが見て取れた。その彼は、先に入った男性の命令に従っている。

つまり、先に入った背の高い男性はもつと上の地位？　もしかして、あのヤクザとは……友人とか？

これからいっただいどうなるのだろうかと不安を抱いていると、滝田が休憩室から出てきた。友梨を見て「あっ！」と声を上げるも、慌てて手で口を覆う。

「なんだ？」

「い、いえ、何も……。も、申し訳ありません！」

滝田がすぐに謝り、深々と頭を下げる。

東雲はそれに返事もせず、友梨を連れて奥の廊下へ続く通路へ進む。その先にあるのは、従業員の立ち入りが禁止されている事務所しかない。

友梨が東雲を窺うと、彼は問題のドアの前で立ち止まりノックした。

「東雲です」

「入れ」

室内から聞こえた言葉を受け、東雲が友梨の背を押して前へ進めと促す。

友梨は初めて広々した事務所に足を踏み入れた。

音を掻き消すふかふかな絨毯、大きな応接セット、彫り細工が見事なアンティークデスク、そして書類が詰まった書棚は、いずれも会社の上司の執務室より豪華だ。

友梨は驚きながらもデスクへと近寄り、そこに座る男性を探る。部下に命令した直後、先に店内に消えた人だ。

「須崎友梨、二十四歳。会社員か……。成長著しい企業に勤めてるんだな」

男性はサングラスをかけたままファイルを見ていたが、尊大な態度で椅子の背に凭れた。友梨を品定めするように、全身に視線を這わせていく。

友梨はスカートの脇で握り拳を作り、男性の鋭敏な眼差しに耐える。すると、彼がふっと口元を緩めてサングラスを外し、素顔を晒した。

その容貌に、友梨は息が詰まりそうになる。

男性に対して抱いた第一印象は、まったく変わらなない。周囲の者を屈服させられるほどの覇気を持ち主だというのは、もうわかってる。

でも、まさか頬を緩めるだけで男の色気を醸し出せる人だなんて……

「滝田の紹介で？」

「……えっ？」

思わず声が裏返る友梨に、男性が片眉を上げ、これ見よがしにファイルを指で叩いた。

「黒服の滝田の紹介で入ったと明記されている」

友梨は眉間に皺を寄せて、小首を傾げた。

滝田の紹介？ そんなはずない。確かに彼は友梨を監視しているようだが、紹介とは無関係だ。

「滝田さんの紹介ではありません」

「では、誰だ？」

途端、友梨は男性の獲物を狙うような野性的な瞳で射貫かれる。戸惑いつつも、おずおすと口を開いた。

「三和さんです……」

「三和？」

「そのような者はいません」

背後にいる東雲が、すかさず答えた。

「確かに働いていないけど、わたしは三和さんからここで働けって言われて……」

友梨はたまらず東雲に告げた。

三和は慶済会のヤクザで、友梨が多額の借金を背負うことになった相手でもある。彼に返済するため、この店を紹介された。

そこに偽りはない。本当だと信じてもらえるように、友梨は男性にも感情で訴える。

「知らないはずありません。だって、ここは慶済会と繋がりがあってあるんでしょう？　そうでなければ、慶済会の三和さんに“Avetasad”で働けって言われるはずが——」

瞬間、男性が急に顔つきを険しくさせ、椅子を蹴って立ち上がった。

「慶済会、だど!?　……猛！」

「すぐに調べます」

友梨は急いで出ていく東雲の姿を目で追うも、椅子の軋む音が耳に入りそちらに顔を戻した。男性は椅子に座り直し、冷たい目で友梨をじっと見つめている。

その威圧感に尻込みしてしまいそうになるが、ここで怯んでは自分の意思が相手に伝わらない。きちんと口にしなければ、この職を失ってしまう。

友梨は数歩前に進み、男性に「嘘じゃありません！」と強く言い放った。

「だって、わたしはお金を貯めるためにここを紹介されたんです。彼に作った借金を返済するために。三和さんが慶済会と繋がりがあってあるお店で働けと言うのは普通でしょう!?」

「まず、言わせてもらおう。この店は慶済会とは一切無関係だ。慶済会と敵対関係にある、真洞会と繋がりがあってある」

「真洞会?　……またヤクザなのね」

友梨は皮肉を込めて言うと、男性から顔を背けた。

もう何がなんだかわからない。慶済会?　真洞会?　そんなの、知ったことではない。ただお金を返済し、もとの暮らしに戻りたいだけだ。なのに、どうしてこう次から次へと先の見えない道へ引つ張られるのだろうか。

眼を閉じた拍子に、母から「すぐに行動するんじゃないやなくて、一步立ち止まって考えなさいって何度も言ってるでしょう?」としつこく言われてきた日々が頭を過る。

そう、こうなったのは全て自分のせいなのだ。

「ここを経営している俺は、ヤクザじゃない」

「ヤクザじゃない?　……でもさっき、真洞会と繋がりがあって」

「真洞会系のフロント企業だからだ」

フロント企業——それは、暴力団を背景にして活動を行う企業や経営者を指す。確かにヤクザとは言えないかもしれないが、公安にマークされる社会的にグレーな会社であることに間違いはない。

友梨が大きいため息を吐いた時、男性が頬を緩めた。またもあの女性を惹き付ける笑みに、吸い寄せられる。

「自分が働かされている店がどこと関係があるのか知らないとは……。ここのオーナーの名前すら知らないのかな?」

男性が目だけを動かし、友梨の心を搦め捕る眼差しを向ける。友梨はどきまぎしつつも、負けじと顎を上げた。

「知る必要ありませんでした。バイト代を借金の返済に回す、それだけ——」

「久蓮コーポレーションの社長、久世蓮司だ。ここは俺が経営している店の一つに過ぎない。店長に任せっきりで顔を出さなかったが、それを逆手に取られたか……」

久世と名乗った男性は、不意に何かを考えるように空の一点を見据える。

その時、ドアをノックする音が響いた。

「入れ」

久世の返事で、東雲が滝田を伴って入室した。久世はそちらに顔を向けない。東雲は真つすぐ久世を見ているが、滝田は伏し目がちにそこに立つ。

何が起きようとしているのかわからない異様な雰囲気、友梨がそわそわしていると、久世が片手を上げた。

「オーナー！」

滝田が切羽詰まった声を発し、その場で膝を折る。

「そこに私の名前が記載されているのは、最初にユリさんに声をかけられたのが私だからです！私がここで働くつもりなのか？」と訊ねたら、彼女は「そうだ」と。それで、私は彼女を店長のところに連れて行った。そういう理由で私が紹介者となっているだけです！」

「本当か？」

初めて久世が顔を動かし、友梨に焦点を合わせる。

嘘を言ったらどうなるかわかっているな？——そう言いたげな冷たい双眸にドキツとなるも、誤

魔化するように彼から目を逸らした。

半月前のあの日、友梨は三和にここへ連れて来られた。でも彼は車を降りず、ただ「Avehasardへ行け」と言った。それに応じて、店の正面を掃除していた滝田に声をかけた。彼が言ったとおり、どこも間違っていない。

「はい。滝田さんの言葉に偽りはありません」

久世は友梨を見つめたまま、ほんの少しだけ手を動かす。指示を受けた東雲が「失礼します」と言つて、滝田と一緒に部屋を出ていった。

二人きりになり、室内がシーンと静まり返る。聞こえるのは、空調の音だけだ。久世の息遣いさえ聞こえないせいか、より一層緊張を強いられる。

友梨の心臓が早鐘を打っているため、余計にそう感じるのかもしれない。

「慶済会の三和、と言ったか？」

友梨はハツとし、いつの間にか伏せていた目を上げた。今もなお友梨を見つめ続ける久世に、軽く頷く。

「彼と出会った経緯を聞かせてもらおうか。どういう理由で借金を背負わされ、ここに来たのかも」

久世がどういう性格の持ち主か知らない以上、今は素直に従った方が身のためだろう。

それに話したところで、友梨に害が及ぶわけではない。三和との出来事を誰にも話すなど、彼に釘を刺されていないのだから……

友梨は息を吐きながら肩に入った力を抜くと、あの日を思い出すかのように事務所にあるカレンダーを眺めた。

——約半月前。

社内は空調が効いているのでそれほどでもないが、一步外に出れば、じわじわと汗が滲み出てくる。

茹だるような暑さから解放されたくて、友梨は同期の岸田笙子を誘い、仕事終わりにシティホテルのビヤガーデンにやって来た。

金曜日ということもあり、緑に囲まれたプールサイドに設けられたテーブルも満席だ。

若いOLから男女のグループから、年配の社会人まで、皆楽しそうにビールをごくごく飲んでる。

友梨たちも同じで、英国産ホップを使用したビールとシェフが目の前で作ってくれる多国籍料理を堪能していた。

特にアルコールが大好きというわけではないが、今夜は本当にビールが美味しい。

「来て良かったよね」

「うん、友梨が誘ってくれて良かった。今日は、もう本当に嫌なことが多くて。聞いてよ！ 営業

部主任の沢木さんがさ——」

小顔に合わせてシヨートボブにした岸田が、報告書作成を頼まれた際の文句を言い連ねる。

友梨はその話を聞き、思わず失笑した。

何故なら、沢木はなんとかして岸田の気を引こうとしているからだ。

それは、総務部の女性のみならず岸田も察していたが、好意の示し方が難ありのため、彼女は彼が嫌いだった。

「営業成績はいいかもしれないけど、あたしにばかり無理難題を押し付けて……」

「確かにあれはしつこかった。毎回思うけど、自分の仕事の補佐をするのは笙子だけだって周囲に思わせたいんだね」

「付き合ってもいないのに!? 沢木さんって二十九歳だっけ？ 気になる女性相手に意地悪って、大人の男性がすることじゃないよ」

「うん、わたしもそう思う。……でもさ、今日は沢木さんの件は忘れて、楽しく過ごそうよ」

細身のビールグラスを持った友梨は、再び岸田と乾杯をして冷たいビールを飲んだ。

普通なら飲み過ぎに気を付けるが、茶巾寿司やパクチーとエビのカクテルサラダ、生春巻きなどどれも美味しく、グラスに口を付けるスピードが速くなっていく。

こうして友梨たちは、閉店の時間が告げられるまで楽しく過ごした。

二人はホテルを出るも、お互いに足取りがあやしい。ふらついては手を取り合い、顔を見合わせ、軽く笑った。

「足元がふらついてしまうほど飲むなんて……。それぐらい筈子との時間が面白くて、気持ちよく飲んでって証拠だね」

「ふふっ、だね！ ……ねえ、今夜はあたしの家に泊まってく？ 友梨の足元、危なっかしいし」
岸田の住んでいるマンションは、会社から四十分ほどの場所にあるが、シティホテルからだ、と、三十分もかからないだろう。一方、友梨は一時三十分以上かかる。家に着く時間を思うと、ため息が出そうだ。

でも、週末は家の掃除だったり買い物だったり、するべきことがたくさんある。今夜は寄り道しない方がいい。

「ありがたい。だけど、今夜は家に帰る。週末はいろいろしないと。さぼっていた掃除とか……」
友梨の言葉に、岸田が片眉を意味ありげに上げる。

「彼氏がいたら、きちんと掃除するのにな」

「それは……否定できません」

神妙に告白すると、岸田は笑いながら友梨に抱きついた。

「友梨ったら！ そういう真正直なところ、本当大好き！ ……だけど大丈夫？」

「うん、大丈夫。酔ってるけど、意識はしっかりしてるしね。筈子もわたしと同じように足元がおぼつかないんだから、気を付けてね」

「うん。じゃあ、また来週、会社でね！」

バス停に向かう岸田とそこで別れて、友梨は反対方向の最寄り駅に向かって歩き出した。
真つすぐ歩いているつもりでも、気付けば路肩へ落ちそうになっている。

そんな自分の行動さえもおかしくて、込み上げてくる笑いを抑えられなかった。たまたらずで口元を覆うも、今度は路肩に止められた車の窓ガラスに映る自分の姿にぶっと噴き出してしまふ。

緩やかに巻いた長い髪の毛のポニーテールが大きく揺れ、その動きが友梨のツボにハマったためだ。
歩道を歩く人たちがこっそり友梨を窺うが、まったく気にならない。

だって、これがわたしなんだもの！ ——と軽く目を伏せた次の瞬間、視界がぐらりと歪んだ。
眩暈を起こしたみたいに、視界の周囲が暗闇に覆われていく。

「あっ……」

足を踏ん張るもふらついた体勢を立て直せず、友梨は道路に身を投げ出すようにして倒れ込んだ。
直後、金属製の物体に激しくぶつかってしまう。

「……っ！」

友梨はそこに手を置いて立とうとするが、上手く立ち上がれない。しかも、胸がムカムカするほど気分が悪かった。

それでも意識をはっきりさせるために強く頭を振り、目をしばたく。すると、徐々に視力が戻ってきた。

目に飛び込んできたのは、艶やかに光る黒いボディ。友梨がぶつかった金属製の物体とは、路肩

に駐車していた車だったのだ。

無様に道路に突っ伏さなくて良かったと安堵しつつも、膝や手首に痛みを感じる。友梨は呻き声を漏らしてゆっくり立ち上がった。

軽くスカートを持ち、膝頭を覗く。そこは擦れて、血が滲んでいた。

「痛っ……。もう最悪……！」

「ふーん、それはこっちのセリフだ」

背後から聞こえた威圧的な口調に、友梨はビクツとなる。

「いつまでそうしてるつもりだ？」

肌をピリピリさせる圧迫感に身震いしながら、友梨はこの状況を把握しようとして視線を彷徨させた。その時、車の窓ガラスに映った人影が目に入り、友梨の心臓が跳ね上がる。なんと幾人もの男性が友梨を囲っていたのだ。

何？ これってどういうこと……？

友梨は恐る恐る振り返り、強面の男性たちを眺める。そして、一人だけスーツを着ているリーダーらしき男性のところで動きを止めた。

男性は三十代後半ぐらいで、右眉の端に大きな傷がある。鋭い目つきも相まって、より一層恐ろしく見えた。

我知らず顔を強張らせてしまった友梨に気付き、男性があやしい笑みを零す。

「自分が何をしたのかわかってるのかな？ 君がつけた傷だ」

顎で指されて車に目を向ける。黒いボディに、白い線がくつきりと入っていた。

もしかして、自分が倒れた際に傷つけてしまった？

震える手で右手に嵌めているファッショニングに触れ、そこをきつく掴む。

「あの、すみませんでした」

「謝るより、弁償してほしいな。でも、君にその金額が払えるのかな。これは——」

男性が車の値段と、修理にはどれぐらいかかるのかを告げた。郊外なら楽に一戸建てが購入できる値段に、友梨は息を呑む。

「それって、ぼったくり——」

途端、男性の瞳に冷酷な光が宿る。まるで一度狙った獲物は決して逃さない、蛇のような目だ。

「ぼったくり？ 君が傷つけたのに、弁償もしないと？ ……ハッ、ふざけたことを！」

男性が苛立たしげに顔を歪めたと思ったら、傍にいた男性に目配せする。すると、後部座席のドアを開け、そこに友梨を引っ張り入れた。

「ちよっ！ ……何をするんですか！」

恐怖から声が震えるが、友梨は通行人にも聞こえるように張り上げた。でも、最後の言葉を言い終えた時には男性が隣に滑り込み、ドアを閉められていた。

エアコンの効いた密室に、二人きりになる。

友梨が生唾をぐくりと呑み込むと同時に、男性がシートに手を突いてにじり寄ってきた。後ずさりするも、ここは車内。ほんの少し下がっただけで、背にドアが触れてしまう。

「別に怖がらなくてもいい。詳しく説明するために車内に招いただけだ」
甘く囁いてくるその言葉に不安を抱きながら、友梨は後ろ手にドアノブに触れる。

どうやって車外へ逃げようかとそれとなく外に目をやるが、先ほどの男性たちが各ドアの前に立っているのを見て、手の力が抜けていった。

友梨が逃げるのを防ごうと、ドアの四方を固めているのだ。

ダメだ、逃げられない！

「怯えなくてもいい。俺は『今』君を取って食おうとしているんじゃないんだ。しかし、返答によつてはどうなるか保証はしないぞ。俺は……慶済会の三和は容赦しない」

男性は腹に一物あるといった面持ちで、友梨の方へ顔を近づける。その行為に不安を覚えつつも、友梨は「……慶済会？」と訊ね返した。

慶済会って、どこかの病院？ 何かの団体？

そんなことを考えながら、三和と名乗った男性を凝視していると、彼が狡猾に唇の端を上げた。

「慶済会と言つてもわからないか。知るのは俺たちの世界に属する者、そして警視庁組織犯罪対策部、通称『組対』『くらいだ』」

「……組対？」

組対って、まさか……！

一般人の友梨も、その名称はドラマなどで知っている。

主に暴力団による、銃器や違法薬物の使用、密売買などの犯罪対策を目的とする内部組織の一つ。

そこからマークされる事実や、三和の威張り方、外にいる強面の男性たちから、ようやく彼らの素性がわかった。

友梨は観念するように項垂れた。

ああ、よりもよつて、どうしてヤクザの車を傷つけてしまったのよ！

「こちらとしては、修理代を全額払ってくれさえすれば文句は言わない」

「全額って……絶対に無理です！ そんな大金、持つてるわけが——」

「持つてないなら、お前の両親のところへ乗り込むか？ 娘のために、退職金の前借り、保険の解約、土地持ちなら売却しろ……と脅せば、早急に用意するだろう」

「やめて！ 両親を巻き込まないで！ お願ひ、やめて」

友梨は苦々しく顔を歪め、首を横に振った。

両親は友梨ほど楽観的ではなく、常に周囲に気を配るほど神経質だ。もしヤクザが家に乗り込んだら、娘のしでかしたことを知れば、きつと心痛を通り越して倒れてしまう。

三和の横暴は、絶対に止めなければならぬ。ならば、友梨がどうにかするしか……

覚悟を決めた友梨は手をぎゅっと握り締め、意思を強く持つて顎を上げた。

「わたしが返します。給料のほとんどを渡しますから、両親には——」

「働いて返す？ 君はOLだろう？ しかも社会人になってまだ一年かそこらに見える。大した稼ぎもない女が、普通にちんたら働いて返せるんです？ 利子を返すだけで何十年とかかる」

「利子!? そんな話は聞いていません！」

瞬間、三和が友梨の顔の傍のシートを激しく叩いた。その音にビクツとして軀を縮こまらせ、友梨は三和を凝視した。

「こっちは慈善事業をする気はないんだよ、お嬢さん。さっさと返済してくれたらそれでいいんだ。親を頼らないなら、こちらが指定する場で働いてもらおうか」

「えっ？」

「俺も鬼じゃない……。性感セラピスト、デリヘル、ソープ、好きなものを選ばせてやる」
突きつけられた仕事に、友梨は啞然となる。

どれも風俗ではないか。不特定多数を相手に軀を使うなんて、絶対にできない。

「わたし、選べません！ それだけは……」

「だったら、キャバクラで手を打とう。ナンバーズリーまでに入れば、風俗ぐらいいは稼げる」

キャバ嬢？ このわたしが!? ——そう思った途端、こんな状況にもかかわらず不意に苦笑いが込み上げてきた。

上司や先輩に気持ちよく仕事をしてもらおうとしても、逆に気を利かせ過ぎて失敗してしまうのに？

友梨はそのことを伝えようとするが、三和の顔からみるうちに表情が消えるのを見て、出かけた言葉呑み込んだ。

どうも三和を嘲笑ったと勘違いしたみたいだ。

もしこんな状況でキャバ嬢も無理だと言ったら、問答無用で風俗に連れて行かれる。それならば、

ここは神妙に頷いた方がいい。

たとえ、友梨の望む道ではないとしても……

しかし、三和にやられつつ放しているのが嫌な友梨は、彼に挑むような目を向けた。

「だったら、きちんとした書類を作ってください。本当に修理費がその金額になるのか、利子はいくらになるのかを明確に。納得がいけば……キャバクラで働き、給料の全額を弁償にあてます」

「ヤクザに難癖をつけるのか!? あまり、調子に乗るなよ」

凄まれて、友梨の口腔に生唾が湧き出てくる。

このまま逃げ出したい衝動に駆られるが、ここで背を向ければ三和の言いなりになってしまう。

決して、操り人形になる道を進んではいけない。

友梨は怯まず、挑戦するように姿勢を正した。

「返済してほしいのでしょうか？ 働くと言ってるんですから、保険を求めるぐらい許してくれてもいいじゃないですか」

「この女、いい度胸してる……！ だが、書類を作るだけで弁償してくれるならそうしよう」

直後、三和がにやりとした。含みを持たせたその笑い方に、友梨の背筋がぞくりとするが、それに負けじと彼を見返す。

自分の尻拭いは自分です。お父さんたちには絶対に迷惑をかけない！ ——そう言い聞かせるものの、やはり心のどこかでは、不安でならなかった。

そうして数日後、友梨は三和から契約書を受け取った。そこに書かれた内容には承服しかねる部

分がいくつも見受けられたものの、正規のディーラーが見積もった金額に異を唱えられない。全てを受け入れた友梨は、判を捺したのだった。

友梨は嘘偽りなく、三和と出会った経緯を洗いざらい話した。

「地方に住む両親には、絶対に迷惑をかけたくないので、全部自分で決めました。わたしは借金を返すために、紹介してもらったキャバクラで働いている。それだけです」

話し終えた友梨は、一度も口を挟まずに聞いてくれていた久世に視線を戻す。

きつと呆れ返った表情をしているに違いないと思っただのに、なんと久世はおかしそうに笑い、それを必死に堪えていた。

その様子を目の当たりにして、友梨はきよんとする。

「何がおかしいんですか？」

「いや……、いろいろ突っ込みどころが多過ぎて。一方で——」

久世が不意に視線を上げ、精気漲る双眸で友梨を射貫いた。

突如、友梨の腰が抜けそうになるほど甘怠くなり、下腹部の深奥に熱が集中して痺れるような感覚に囚われる。

「よくやった。脅してくるヤクザに、一般市民の君がそこまで自分を保てるとは驚きだ！ まあ、

意のままに手のひらの上で転がされてはいるが、自分の力で立ち向かったその心意気は感心する」

褒められてる？ それとも……貶されている？

妙に早鐘を打つ心音が気になるも、友梨は久世を横目で睨み付けた。

「もうこれでいいですか？ 早く家に帰って休みたいんですけど」

「慶済会と繋がりのある君を、この状態ですんなり帰すと？ ここで働かせると？」

久世がからかうような目つきをする。

友梨は目を見開くが、久世は気にせず椅子に凭れて腕を組んだ。

「君の要求は呑めない」

「普通にキャバ嬢として働いているだけなのに？ 問題を起こしてはいいのに？」

「今は何も起こっていない。だが慶済会がわざわざ真洞会と繋がりのある、Avelasard、に君を寄越したのには理由があるはず」

「ただここで働かせたかったのでは？ お給料がいいとか……。だって三和さんがわたしに求めたのは、借金の返済だけだもの！」

「金、ね……」

久世はポツツと吹き、デスクに手を伸ばす。友梨の履歴書が入ったファイルを手元に引き寄せ、それを見ながら思わせ振りに何度も指で叩いた。

「須崎友梨……か」

しばらくして友梨の名前を口にした久世は、さっと彼女を見る。

「三和の借金、俺が全額立て替えてもいい」
「えっ!？」

どうしていきなりそういう話を？ 久世が友梨の借金を立て替えて、いったいどんな得が!? 友梨が驚くと、久世の瞳に秘密めいた光が宿る。

「ヤクザへの借りは、想像以上に高くつく。だが、俺なら……ゼロにしてやれる」

久世の物言いに不安を覚えるが、彼はそれ以上口を開かない。まじろぎもせず黙っている。

友梨も久世に対抗して口籠もるが、ものの十数秒で降参してしまった。

「その見返りは？」

駆け引きを好まない友梨は、率直に訊ねた。

途端、久世が目伏せる。そうしながらも、彼は嬉しそうに頬を緩めた。

「見返り？」

「そうです。そこまでして大金を立て替えるオーナーの気持ち理解できない。わたしが返済する相手が三和さんからオーナーに代わるだけでしょう？ ……そうすることで、いったいあなたにどんな利益があるんですか？」

「俺の利……ね。そういう風に頭が切れる女は好きだ。余計な話などせず、本題に突き進める」
やっぱ裏があったのだ。

久世はヤクザではないが真洞会と繋がりがあり、その真洞会は慶済会と敵対関係にある。普通なら争いを避けるはずだ。わざわざそこに波風を立てる真似などしない。

でもそうするからには、久世にとって何か利があるのだろう。

もしかして、三和が取った行動を逆手に取り、友梨に慶済会と関係のあるキャバクラへ乗り込ませ、向こうの経営状況を調べるとか？

考えれば考えるほど、頭が痛くなってきた。

久世の駒として使われるぐらいなら、現状のままでもいい。

「ご厚意は有り難いんですが——」

「俺個人と契約を結ばないか？」

断ろうとした刹那、久世に言葉を遮られる。

友梨は苦々しく顔を歪め、もう一度そんな気はないと態度で示そうとする。しかし、久世はそれを遮るように勢いよくファイルを閉じた。

「俺と契約を結べば、慶済会と手を切れる。その上、キャバクラで働く必要はない。いい話だとは思わないか？」

「……え？」

働く必要はない？ だったら、どうやって立て替えてもらうお金を返済していけばいいと？

呆然となる友梨に、久世が軽く口元をほころばす。

一瞬、久世の情に満ちた表情にほだされそうになるが、彼の双眸に宿る強い意志を見て、友梨は緩みそうになっていた気を引き締めた。

「立て替えてもらったとしても、わたしが働かないとお金を返せませんが」

「だから、俺と個人的な契約を結ばないかと提案してる。暴力団と手を切れる。クラブで不特定多数の男たちに媚びを売る必要はない。会社の仕事にも差し支えない……」

「上手い話には裏があると云いますけど……」

友梨が言い返すと、久世が大声で笑い出した。

「慈善事業じゃないんだ。裏があつて当然だろう？　だが、お互いに利があると踏み、この話を持ち出した。もし断るなら、慶済会と関係のある君を、さつさと店から放り出す」

「わたしを放り出す？」

そうなれば、三和にまた別のキャバクラを紹介される。もしかしたら友梨に難癖をつけ、今度は風俗嬢として働けと脅される可能性も考えられる。

わたしにとって、どれがいい道なの？　慶済会との付き合い？　それともオーナーとの個人的な契約？　——と考えるが、友梨にとつて一番いいのは後者だという声も、もう頭の中で響いていた。

「わたしは、オーナーと新しい契約を結ぶしかないってこと？」

「それは君次第だ。イエスなら俺と新たな契約を、ノーなら早急に出ていってもらう！」

友梨は唇を引き結びながら目を閉じるも、すぐに久世に意識を戻した。

「その新たな契約って？」

「俺と愛人契約を……」

「はあ!？」

うっかり大きな声を上げてしまう。

久世はそうなるのを予想していたのか、楽しげにふっと頬を緩め、椅子から立ち上がった。

百八十センチはゆうにある背の高い久世が、デスクを回って近寄ってくる。

友梨は引き寄せられるように、久世の姿を目で追った。

「もちろん、拒否権は君にある——」

久世はそう告げたあと、まずは借金の返済について話し始めた。

暴力団と縁を切るために、利息も含めて全て久世が肩代わりする。でも借金は彼に移り、友梨は彼に返済することになるという。しかも返済するのはお金ではなく、愛人として彼に尽くすことだった。加えて、都心に住む彼の家で同棲しなければならない。

その話には啞然とする友梨に見向きもせず、久世が「まず、契約金として借金の三分の一は返済したことにする」と口にした。続いて、一ヶ月ごとに返済にあてられる金額を提示したあと、愛人として久世の求めに応じた際にボーナスを支払うと言った。

「それって、わたしに軀を売れと？」

「無理強いはしない。だからボーナスと言っただろう？　ただ月に四回は必ずセックスに応じてもらう」

「月四回!？」

生々しい発言に声を荒らげる友梨に、久世は片眉を上げる。

これでも少ないと言いたげな目つきに、友梨の軀は火が点いたように熱くなっていく。たまたらず軀の脇で手を握り締め、唇を引き結んだ。

「契約以上の行為を求める時は、さらにボーナスを上乗せしよう。そうすれば、借金の額も減り、俺との縁も早く切れる。君にとつていいことづくめでは？ ああ、愛人契約を結んでいる最中は、君以外の女性と関係は持たないと約束する。その代わり、君も貞節を守り、俺の唯一の女性だと振る舞ってほしい」

まるで取引先と交渉するかのようになり、久世は淡々と契約内容を口にしていっていった。

本当に友梨と愛人契約を結びたいと思っているのだろうか。

久世の真意を測りたくて、友梨は久世を凝視した。

第一印象のとおり、久世は周囲の者を屈服させる覇気の持ち主だ。精気も漲っている。こんなに男らしい人に見つめられたら、どんな美女も虜になつてしまふに違いない。

滅多に男性に心を動かされない友梨でさえ、久世と目を合わせるうちに奥深い部分を刺激された。だからこそ、何故友梨を愛人として傍に置きたがるのか不思議でならない。

いや、こういう男性だからこそ、契約で意のままに動かせる、都合のいい愛人が傍にいればいいのだろう。求めるのは、心を通わせる恋人ではない。軀の関係のみを享受できる愛人なのだ。

でも何故、その愛人を友梨に？

「以上だ。質問は？」

「どうしてわたしに白羽の矢を？」

率直に告げると、久世が距離を縮めてきた。手を上げたと思つたら、友梨の顎に触れ、彼を見上げるように促される。

徐々に顔を下げてくる久世に目を剥くも、決して彼から意識を逸らさない。すると、彼の視線がこれ見よがしに友梨の唇に落ちた。

途端、胸の奥がざわめき、下腹部の深奥に熱が集中し始めた。軀の反応に感情を抑えられず、唇がかすかに震える。

すると、久世が頬を緩ませた。

「君の気概を買つたんだ。ヤクザ相手に立ち向かう、その強い気持ちをね。君なら、俺の傍にいても困難を乗り越えられる。そして、決して契約以上を俺に求めはしない」

契約以上？ いったい友梨が何を求めるというのだろうか。

不思議に思いながらも、友梨は久世の目を見返した。

「いい話だと思うが？ 慶済会との縁は切れ、会社に夜の仕事をしているとバレない。君は俺と付き合えばいいだけ。……さあ、どうする？」

「少し、考えさせて——」

「今だ。考える時間は与えない。俺との愛人契約を結ぶか、それとも『Avesard』をクビになり、三和のもとへ戻るか、好きな方を選んで」

卑怯だ。前者しか選べなくするなんて！

とはいえ、それが友梨にとつて一番いい方法なのはわかつていた。どちらも身は危ういが、久世に頼る方がマシだと感じてしまう。

何故そう思うのだろうか。久世だって暴力団と無関係とは言えないのに。彼の方が三和より誠実

な態度を取るから？

どうすればいいのか、心はもう決まっている。でも気持ち振子のように揺れ、なかなか勇気が出ない。

顔を歪めた友梨は、喉の奥から声を振り絞った。

「……強引ですね」

「それが俺だ。俺と契約を結ぶなら、こういう俺も知っておくべきだな」

決して怯まない強気な口調を受け、友梨は久世と目を合わせる。

久世は面白がってはいるが、友梨を見る双眸は真剣で、そこに彼の真直な部分が見えた。

三和にはない、相手と向き合おうとする久世の真摯な姿勢を目の当たりにした途端、揺らいでいた心の振り子がぴたりと止まる。

友梨の覚悟がようやくできた瞬間だった。

「さあ、聞かせてもらおうか。俺か、慶済会か……」

「あなたと契約を結びます。その代わり、きちんと契約書を——」

「ああ、作ろう。君に話したままのとおりを。だが、まずは仮契約を……」

そう言うと、久世が顔を傾けて友梨の唇を塞いだ。

いきなりの口づけに、友梨は目を見張る。

柔らかな唇をついばまれ、いやらしくそこを濡れた舌で舐められた。たったそれだけで尾てい骨のあたりに甘い疼き走り、そのまま腰砕けになりそうになる。

や、やめて！ ——そう声を張り上げたいのに、言葉が喉の奥に引つ掛かって出てこない。軀さえも自由に動かせなかった。

友梨がかすかに身震いした時、久世が名残惜しげに唇を甘噛みしてから顔を離れた。

「これで仮契約は成立だ」

友梨の唇の上で、久世が囁く。それが切っ掛けとなり、友梨は彼の傍から素早く離れ、唇を手の甲で覆った。

「キ、キスもポーンナスに入れてください！」

自分の身に湧き起こった感情を消すように叫ぶ。すると久世がおかしそうに笑い、その言葉は受け付けないとばかりに頭を振った。

「こんなのはキスのうちに入らない。いずれ、それを教えてやるう」

友梨は腹立たしまぎれに唇をごしごし拭ったあと、久世に背を向ける。

「もういいですよ。じゃ、帰ります！」

「今日のところはそういう反応でも構わないが、契約書にサインしたあとは、必ず俺の愛人として振る舞うこと。もし反抗したら……借金は減らないからな。……友梨」

容赦のない言葉に、友梨はドアノブに触れながら肩越しに振り返った。

契約も交わしていないのに、もう呼び捨てにするなんて！

「わかりましたとも……蓮司！」

挑戦するかのように叫んだあと、友梨はドアを開ける。

その時、久世が大声で笑い始めた。友梨が苦々しく顔を歪めると、ドアの傍に立っていた東雲が、不機嫌そうに友梨をちらつと見る。そして、友梨と入れ替わりで室内に入った。

「若！」

東雲は声を上げ、事務所のドアを閉めた。

「……若？」

友梨は東雲が口にした呼び方が気になったものの、すぐに頭の隅に追いやり、廊下を進む。従業員用のドアを開けて外に出た。

つい数十分前の冷たい風は気持ちよかったのに、今では寒気に襲われて背筋がぞくぞくする。

これからいったい何が起こるのだろうか。

そんな不安に襲われるも、友梨は前だけを向いて歩き出した。

「若！」

久世はまだ込み上げてくる笑いを止められなかったが、友梨と入れ替わりで入ってきた東雲の呼びかけで、表情を消す。

「その呼び方はやめろ。組を出たんだ」

「す、すみません……社長」

何年も前に捨てた呼び名で呼ばれると、未だに当時の出来事が脳裏に浮かぶ。

楽しくもあり、苦くもあつた日々が……

頭に過つた思いを振り払うように、久世はデスクの上のファイルを手に取り、そこから友梨の履歴書を抜き取った。

「須崎友梨と愛人契約を結ぶ」

「事前に調べもせず、懐へ迎え入れるんですか？」

久世から履歴書を受け取った東雲が、声を荒らげる。

「彼女が嘘を言っている節は見られない。何よりヤクザに騙されたのに、一般市民の女が慶済会に立ち向かったんだ。面白いと思わないか？ その気概があれば、俺の傍にいても立ち向かえる。あの件も片付く……」

あの件——それは以前に付き合った女性のこと。いろいろな出来事が重なり数ヶ月で別れたが、十数年経った今でも彼女は久世と親密な関係を取り戻したいと思っている。

既に婚約者がいる身だというのに久世への執着が激しく、あの手この手を使って久世が関係を持つた女性たちを精神的に追い詰めていった。

問題なのは、彼女が自分の手を汚さずに罫を仕掛けてくるという点だ。知っているのなら、久世自身が彼女を問い詰めて解決すればいい話だが、実はそれができない。

久世には、そうする権利がないためだ。

だからこそ、彼女が何かを仕掛けてきても、気丈に立ち向かえる愛人が必要だった。

久世に執着しても無駄なんだと、自ら律してほしいから……

「なんとかしたい気持ちばかりですが、それでもやはりあの女性を信じるべきではないかと。並外れて強気なのが、余計にあやしく思えますが？」

「そっちは気にするな。俺と友梨の個人的な契約だ。それより——」

久世は、慶済会の三和と滝田が気になっていた。友梨との件は、問題が片付くまで楽しめばいいだけだが、慶済会が絡むそっちは放っておけない。三和という男とは面識がなく、滝田の話にも疑う余地はない。にもかかわらず、久世の頭の中で警鐘が鳴り響いている。

あまりにも穴がなさ過ぎると……

「久世社長？」

「滝田の話に嘘はない。真実を話していた。一方で、明らかに故意に口にしなかった件があるはず。そこを探れ」

「慶済会の手の者だと？」

「どうも引つ掛かる。まずは滝田だ。あと……お前の弟分、赤荻剛を呼び寄せろ。友梨の護衛に付ける」

「御意」

東雲が事務所を出ていくのを見て、久世は椅子に座った。腕を組み、楽な姿勢を取って目を瞑る。何か大変なことが起こりそうな予感がする。反面、その心配を打ち消すほどの喜びが、胸の奥で

渦巻いていた。

久世を前にしても動じない友梨の顔が臉の裏に浮かび、自然とにやついてしまう。

「須崎友梨か……」

キャバ嬢のナンバーワン、ツーに比べると、派手さに欠ける。だが、友梨には目を惹き付けられるものがあつた。透明感のある美しさとも違うのか。

それ故、余計にあの勇ましい性格とのギャップに興味を引かれるのかもしれない。

「久し振りに楽しく過ごせそうだ」

悠々と目を開けた久世はスマートフォンを取り出し、部下の一人に電話をかける。

友梨の引越しを進めるためだった。

「友梨？ ……友梨!？」

岸田の声で友梨は我に返り、パソコンの液晶画面から視線を動かした。正面に座る岸田が、心配そうに見ている。

「どうしたの？ 寝不足？ ……午前中もボーッとしていたし、午後に入ってもずっと、心ここにあらず、なんだけど。大丈夫?」

「あつ、ごめん。大丈夫。ここ数日、寝るのが遅かったせいかも」
本当にいろいろあった。

何せ、オーナーの久世と愛人契約を結ぶ約束をしたのだから……
誰だって人生が一変するような出来事が起これば、寝付けない。

「そういう日もあるけど、ほらっ……部長が睨んでる」

岸田が目配せで五十代の部長を指す。恐る恐るそちらを窺うと、彼女の言ったとおり、友梨を咎める目で見つめていた。

上司に慌てて頭を下げた友梨は、岸田に「ありがとう」と囁き、各部署から上がってきた書類の作成を始めた。

その時、頻繁に総務部に顔を出す、営業部の沢木がやって来た。迷いなく岸田のもとへ行き、彼女の机にクリアファイルを置く。

「岸田さん、これをお願いできるかな? 定時まで」

「なんですって? 定時まで二時間しかないの!？」

岸田は不快な感情を隠そうともせず、顔をしかめた。

「二時間あればできるだろう?」

沢木の高飛車な態度に、もう我慢ならないとばかりに岸田が勢いよく立ち上がった。これまでになかった彼女の行動に、彼がぎよっとする。

「あたしは沢木さんの秘書ではないの。他にも仕事があつて、あなただけを優先するわけにはいかない。どうしてわからないんですか? ……しかも、余裕を持って提出すらしてくれないなんて」

「営業で忙しいんだよ」

沢木の物言いに、部署内の社員たちがため息を吐いた。彼は、毎回こうやって岸田の邪魔をしては気を引こうとするからだ。まるで小学生が好きな子に意地悪をして、意識を自分に向けさせるかのように。

本当、いい大人の男が取る行動ではない。

社員たちが見守る中、岸田が再び沢木に文句を言おうとするも、椅子に座り直した。

「わかりました。予定の時間までに仕上げます。その代わり、出ていってもらえますか? 仕事の邪魔ですの」

「岸田さん！」

沢木が岸田の肩に触れようとするのを見て、友梨はぎよっとする。彼の行き過ぎた行為を止めさせるために、手にしたファイルを強めに机に置いた。

「岸田に渡したのは、先方にお渡しする覚え書きか何かでしょうか。それを定時までに欲しいのなら、彼女の邪魔をしないでください」

久世とやり合った鬱憤を晴らすかの如く、友梨は苛立ちを沢木に向ける。すると、彼は驚愕して友梨に目を向けた。

「き、君の言い方は——」

沢木が顔を真っ赤にする。友梨は親友を守るために彼に立ち向かおうとするが、それを止めるように部長が動いた。

「沢木さん。定時までにお届けできるだけよう尽力するので、時間をください」

部長は白髪まじりの頭をほんの僅か下げ、丁寧告げる。

年配の男性にそうされたら我を通せないと思っただろう。

「わかりました。では、よろしくお願ひします」

沢木はさりげなく岸田を見て、総務部をあとにした。

「部長！ 沢木さんの態度について、営業部に文句を言ってくださいよ。この夏以降、だんだん図に乗ってきてるんですから」

「そうしよう。さすがに彼の素行は目に余る。ところで——」

そう言った部長が、友梨に視線を移す。

「岸田さんを守ろうとする気持ちはわかる。だが、あんな風に盾突かれたら、彼も引くに引けなくなるだろう？ これまで同様、上手くあしらいなさい」

「はい。申し訳ありません」

友梨が素直に謝ると、部長が頷く。彼は自分の席に戻っていくが、途中で振り返り、友梨たちを見回した。

「ただ、私もこれ以上は看過できない。営業部部长に話をつける。もうしばらく我慢してほしい」「ありがとうございます！」

同僚たちはそれぞれ安堵の笑みを浮かべ、胸を撫で下ろす。友梨もそのうちの一人だったが、部長に厳しい目を向けられて姿勢を正した。

「今日はいつものより集中力がなかったみたいだね。岸田さんの仕事を手伝いなさい」

「わかりました」

友梨はデスクを回り、岸田の横に立った。ファイルを持つと、彼女がそっと友梨の腕に触れる。

「ごめん……」

謝る岸田に気にしないでと伝えるように軽く頭を振り、友梨は自分の席に戻った。

仕事に取り掛かるが、なかなか量が減っていかない。すると、自分の仕事を終えた同僚たちが友梨を手伝ってくれた。

そのお陰で、ぎりぎり定時で今日の仕事が終わった。

「忙しいのに手伝ってくれてありがとうございます！あの……行ける人だけでいいので、皆でご飯に行きませんか？」

岸田が同僚たちに声をかけ、参加者を募る。そうして、予定のある者以外で夕食に行くことになった。

友梨たちはオフィスビルを出て、皆でわいわいしながら歩く。しかし、途中で先ほどの仕事の話になると、岸田が急に拳を振り上げた。

「今まで黙って耐えてきたけど、もう我慢ならない！」

「岸田さんが、沢木さんの想いに応えてあげたらいいんじゃない？頭を撫で撫でして」先輩が面白おかしく言うと、岸田がとんでもないと顔を真っ青にする。

「無理！有能で、女性の目を惹き付けるほどの容姿でも、あの子どもっぽい性格は受け入れられない。先輩だって無理でしょう!？」

「無理っていうより、あたしには彼氏がいるし」

そう言っただけで彼女は左手を挙げて、薬指で輝くリングを見せる。

岸田が「羨ましい！」と本気で悔しがる姿に、皆で笑い合った。

「今夜は飲みたい気分だから、たくさん飲めるところがいいな。居酒屋？焼き鳥屋？」

「だったらいいお店が——」

先輩たちと岸田のやり取りに、友梨も加わった時、歩道の脇に黒塗りの車が横付けされた。何気なくそちらに目を向けると、後部座席の窓が滑らかに下がっていく。

車内にいる人物——久世蓮司の顔が目に入るや否や、友梨の心臓が痛いぐらいに跳ね上がった。

喉の筋肉が強張り、息をするのも苦しくなる。

久世は鋭い目を友梨だけに向けていた。

「な、何？あたしたちの方を見てみたいだけだ」

「でも素敵な人じゃない？妙に惹き付けられる。男の魅力？色気ってどうか……」

同僚たちが色めき立つ中、友梨だけが久世から目を逸らせない。

どうして会社にまで？今夜はキャバクラに寄って、久世と連絡を取るつもりでいたのに……

久世に見つめられるうちに、クラクションの音、岸田たちの話し声などの喧騒がどんどん遠のいていく。歩道を歩く人たちでさえ視界に入らない。もう彼のことしか考えられなくなる。

そんな風になる自分が怖い——と思った瞬間、久世が目で車内を示し「ここに来て」と合図を送った。

久世はここに来て、友梨を連れて行こうと思えばそうできるのに、あえてそれをしない。

もしかして、友梨が同僚たちの前で慌てないようにしてくれたのだろうか。

「友梨、行こう！」

岸田に声をかけられ、友梨は我に返った。先を進む同僚たちを目で追い、岸田と向き合う。

「あの、用事があったのをすっかり忘れてた。次は参加するからって、皆に言ってくれる？」

「えっ、そうなの？……わかった。じゃ、また明日ね」

不可解な表情をしつつも、岸田は同僚たちのもとへ走る。

彼女たちの後ろ姿が目に入らなくなると、友梨は久世の乗った車へ歩き出した。

助手席からスーツを着た男性が降り立ち、後部座席のドアを開ける。これから何が起こるのかと身構えつつ、友梨は久世の隣に身を滑らせた。

車はすぐに発進するが、久世は一言も発しない。友梨は不安を押し殺しながら、前方に座る男性たちに目をやった。

運転手は面識のある東雲だ。助手席の男性には見覚えがないが、東雲よりやや若い。

この二人を連れて、今からどこへ行こうというのか。

久世を窺うと、それを待っていたかのように、彼が友梨の膝に大きな封筒を置いた。

「愛人契約の書類だ。目を通して判を捺してもらおう。借金返済については、こちらで用意した弁護士に任せる。いいな？」

「はい」

そう返事する他ない。ただ、東雲は別としても、助手席に座る男性にまで、愛人契約を知らせる必要はないのには思わずにはいらなかった。

友梨は手にした封筒をきつく掴むも、小さく息を吐いて気持ちを切り替える。

「確認して持っていきます。駅で降ろしてもらう前に、連絡先を教えてください」

「連絡先？ あとで教えよう」

「あとで？ ……つまり、これからどこかへ行くけど？ ひよつとしてキャバクラ？」

友梨の問いに、久世がおかしそうに片頬を上げた。

「すぐにわかる」

久世の思わせ振りの態度に心拍数が上がった時、スモークガラスの向こう側に、友梨も知る有名な高層マンションが見えてきた。

湾岸の方？ どうしてそっちに行くの？ ——そう思っていると、車は高層マンションへ向かい、あるうことか、そのエントランスの前で停車した。

驚く友梨を尻目に、助手席に座っていた男性が外へ出て、久世側のドアを開ける。久世は流れるような動きで車を降り、友梨に目を向けた。

「いったいどこへ——」

友梨は声をかけるが、車外に出た男性たちに一斉に見つめられて口を閉じる。

ここで問い詰めてもどうなるものでもないどと覚悟を決めた友梨は、しぶしぶ車を降りた。

「こっちだ」

久世に促されて、マンションのエントランスに入る。

友梨の目に、大理石が敷き詰められた床や壁、玄関ホールを照らす豪華なシャンデリア、応接セットが飛び込んだ。広いカウンターの中には、四十代ぐらいの男性コンシェルジュが立っている。

「久世さま、お帰りなさいませ」

コンシェルジュの挨拶に、久世は軽く頷き、友梨をエレベーターホールへ導く。最上階で降り、数戸しかないドアの一つを開けた。

広々とした玄関も、マンションのホールに劣らない。
ここはいったいどういう部屋？

事務所なら、高層マンションの最上階に置く必要はない。もつと出入りしやすいビルにするはずだ。

もしかして、久世が誰かと密会する部屋なのだろうか。

友梨は注意深く周囲を見回し、先を進む久世のあとを追う。その後ろを、男性二人が続いた。まるでどこかへ連行される錯覚に陥り、友梨の手のひらが湿り気を帯びてくる。込み上げる生唾を呑み込んだ時、久世が廊下の先にあるドアを開けた。

途端、何十畳もの広さがあるLDKの部屋が視界に飛び込んできた。壁に掛かるテレビと絵画、柔らかそうなソファ、十人は座れるダイニングテーブルなどがある。大きな窓の向こうには、都心の眩い夜景が煌めいていた。

「座れ」

ソファに腰を落とした久世が、傍のソファを顎で指す。

友梨はどうしようか迷うものの、ここまで来て逆らうのは得策ではない。おずおずソファに座ると、東雲が久世の傍に、もう一人の男性が友梨の背後に立った。

久世が友梨の後ろに立つ男性に何か合図を送ったあと、彼は友梨の持つ封筒に視線を落とした。

「友梨、今からそれをチェックしてもらおう」

「今!?!」

「そうだ」

「家で契約内容を確認する時間すら与えてくれないの?」

友梨の物言いに、久世が軽く顎を引いて失笑した。

「家? 契約の間は同棲すると言っただろう? 今夜から俺の自宅で……ここで暮らしてもらおう」

「自宅!?!」

友梨が目を見開くも、久世は動じない。それどころかゆったりとした所作で脚を組み、友梨の心の奥にある心情に深く入り込もうとするかのような目つきをした。

「君の部屋にあった荷物は、業者に頼んで既にここに運び込ませた」

「なんですって!?!」

「不要な家具は貸倉庫に入れてある。契約満了してここを出ていく時、新居に運び入れよう」

勝手な行動をされて怒りが湧き起こってくる。しかしそれを吐露する前に、東雲に「こうなった責任はあなたにあるんですよ?」と言わんばかりの冷たい目で射られた。

友梨はすぐに平静に戻る。東雲が訴えるとおおり、友梨の借金が原因だからだ。

「友梨の後ろにいるのは、俺のアシスタント……東雲猛の弟分、赤荻剛だ。この先、君の護衛をさせる」

「護衛? ……わたしには必要ないです」

「まだわかってないのか? 俺は、暴力団と繋がりがあつフロント企業の社長だ。同系の会社から恨みを買うのも多い。それで、気概のある君と契約を結ぶことにしたんだが」